

日本研究の国際化及び学際化にむけて

ファン・ハイ・リン

はじめに

2017年5月に、国際日本文化研究センター（日文研）は創立30周年記念を迎えたが、同年の4月に日本の歴史科学協議会（歴科協）も創立50周年を記念した。日文研は「日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、世界の日本研究者を支援する」ことを目的とした政府の交付金によって運営されている大学共同利用機関である¹。それに対し歴史科学協議会（歴科協）は「歴史学の創造的発展」を目指した自主的組織の協議体として発足した²。前者は研究対象が「日本」であり、研究主体の中心が日本外の研究者で構成され、国際的かつ総合的な研究が求められるインターディシプリンの視野を持っている。後者は研究対象が日本史を含めた歴史で、主な研究主体は日本人の研究者であり、時代ごと、或いは歴代の個別な研究が求められるディシプリンの視野を持っている。そこには、各機関の創立時の世界における日本の位置づけと研究潮流が反映されると言えよう。

グローバル化が進む昨今、ディシプリンとインターディシプリンの境界線があいまいになり、研究の実効性が重視され、国際的な視野及び学際的な方法が求められるようになった。本稿は、近世における日越交流に関わる象貿易と松阪縞織のルーツを事例にして、日本研究における資料源の国際化及び研究方法の学際化の重要性を論じてみたい。

1. ベトナムから日本への象貿易に関する研究事例からみた日本研究の国際化

1.1 ベトナムから日本への象貿易に関する史料と文献

日本においては、原始・古代の遺跡で象の骨歯が発見されたのは周知のとおりだが、後に絶滅したため、中世以降、象は海外の珍しい生き物であり、海外から運ばれる度に重要な出来事と見なされていた。最も注目されたのは享保13年（1728）にベトナムからやって来た牝象2頭の象であった。牝象が長崎に着いた3ヵ月後、気候や食物が合わず死んでしまったが、牝象はその後14年間も日本で生存した。象が渡来した翌年の享保14年には、象の訪れた各地方で版本や詩集が出された。京都の本願寺塔頭智善院の『象志』や、中村三近子著『象のみつぎ』、奥田士亨編『詠象詩』、白梅園の『霊象貢診記』、『献象来歴』のほか、大坂の油煙齋著『家津登』、江戸の林大学頭榴岡著『馴象編』や、林家塾頭井上蘭台著『馴象俗談』、神田白竜子著『三獣演談』などが有名であり、これ

¹ 日本国際文化研究センター 所長のあいさつ、<http://www.nichibun.ac.jp/ja/about/>

² 歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題』、2017年、3頁。

らは象の研究に重要な史料である。

享保年間におけるベトナム象の日本渡来に関する研究も多く蓄積されている。その中で特筆すべきは、1972年に発表された山下幸子氏の『享保の象行列』である（山下幸子、1972年）。山下氏は尼崎藩の岡本俊二文書をはじめ、享保13年渡来象に関する史料を網羅して、上陸した長崎から江戸到着まで象の行列について細かく検討した。一方、山下恒夫は『石井研堂コレクション・江戸漂流記総集』のなかで享保13年渡来象と同行した安南国人に関する史料の分析も試みた（山下恒夫、1992年）。そして、2000年10月に埼玉県で「象がゆく・将軍吉宗と宮廷〈雅〉」と題した特別展が開催され、その展示で埼玉県立博物館、神戸市立博物館、国立公文書館内閣文庫、関西大学図書館などで所蔵される享保13年渡来象に関する絵図と史料が紹介された（埼玉県立博物館、2000年）。

上記の研究では、検討された資料と研究範囲が日本国内という特徴がある。筆者はベトナム人という立場から、ベトナムや西洋の資料を加え、先行研究でまだ明らかになっていない問題、いわゆる日本のベトナム象への関心や運搬の要請、象の売買価格、運搬船などについて着目し、この10年間研究を行い、数回論文で発表した³。本稿においては日本研究の国際化の事例として、象の研究の手掛かりをまとめることにしたい。

1.2 資料源の国際的な活用とクロスチェックにより明らかになったこと

まず、ベトナム象への関心と要請を検討するにあたり、ベトナム光興14年（1591）閏3月21日付「安南国副都堂福義侯阮書」に注目したい。2013年にこの史料を紹介した藤田励夫氏は、当時のベトナムと日本との外交的な関係を分析し、ベトナムの阮氏⁴より「日本国王」に宛てた最古の通交文書であると評価した⁵。しかし、筆者はベトナム象に関する次の記述に着目した。「前年見陳梁山就本國謂、國王意好雄象、有象壹隻已付陳梁山將回、國王其體小不能載、有好香貳株・雨油蓋壹柄・象牙壹件・好紵貳匹寄與、明年隆巖又到本國謂、陳梁山并財物未見、茲有雨油蓋壹柄再寄與國王為信」⁶。これで、16世紀末に日本からの牡象運搬の要請が既にベトナムまで伝わったと推測している。そのみならず、17世紀に描かれた「茶屋新六交趾渡航図巻」⁷も、ベトナム象への関心が伝わっている。この絵図を通して、茶屋家の海上・陸上の行程、当時の日本人町などを分析する研究は数多く出されている。しかし、絵図左端の上角に描かれた象使

³ 象貿易に関する筆者の主な論文は、『アジア文化交渉研究』の「ベトナム資料における象の位相と享保13年到来象について」（2010年、tr. 545-562）、『東アジア文化交渉研究』に掲載された「16世紀～18世紀におけるベトナム中部から日本への象貿易」（2014年、tr. 413-422）、菊池誠一編『朱印船貿易絵図の研究』の「茶屋交趾貿易渡海絵図」に描かれた象について」（2014年、tr. 55-60）である。

⁴ 「安南国副都堂福義侯阮」はベトナム中南部の順化（トゥアンホア、現在のフエ）を拠点にした広南王国（1533-1777）の阮氏であるか、ベトナム北中部のゲアン（乂安）省の阮氏であるかはまだ定説がないが、中部の権力者であることが考えられる。

⁵ 九州国立博物館編『ベトナム物語—大ベトナム展公式カタログ』、2013年、18頁。

⁶ 九州国立博物館編、前掲書、105頁。

⁷ この絵図は現在名古屋市の情妙寺に所蔵されている。

いにより調教される3頭の象には殆ど注意が払われていなかった。筆者は茶屋家による幕府への報告書としての価値があるこの絵図において、象が詳細に描写されていることより、江戸時代の人々のベトナム象への関心が高まったと判断している。

次は象の取り引きと価格に関して、ベトナム、フランスと日本の資料をクロスチェックすることにした。18世紀のベトナムの知識人である黎貴悳は、ベトナムとラオスの国境にあるカムロ（甘露）地方の市場⁸で取り引きされた象の価格について「一象價銀二笏」⁹と述べた。「笏」とは約10両に相当する銀である。また、17世紀にベトナムを訪れたフランス人のダニエル・タヴェルニエによると、実は安南で使用された銀は日本銀と同様のものではあったという¹⁰。そして、『安南紀略藁』には、「安南板銀」と呼ばれたベトナム銀について、「掛目凡百日程」と記されている¹¹。ここで判断できることは、もし当時の100目が10両に当たるなら、近藤の描いた「板銀」は10両に相当し、黎貴悳の述べた「笏」と同じものになる。ベトナム国内で売買される象の価格は「二笏」であることから、20両に相当することになる。

象の運搬に関する請求と費用について、嘉永6年（1853）に林復斎等が編集した『通航一覽』には、第38番東京船主の呉子明に関する記述が次のようにある。「蒙問委帶小象、可以帶來否、但此獸出在暹羅地方、唐山各省並無、若蒙諭委帶、遵依帶來進上」¹²。つまり、ベトナムの東京¹³出身の呉子明という船主の幕府に勧めた象はベトナム産の象でなく、暹羅産の象ということである。しかし、2年後、暹羅産でなく、広南（ベトナムのダンジョン）の象が、第15番唐船の船主である中国人の鄭大威により運搬された¹⁴。同『通航一覽』にも「一象其帶來、小船不堪裝載、徒新定造大船二艘、每艘只裝得一隻、但欲定造大船二艘、要用銀一萬餘兩、又唐山發船到暹羅、往來雜費、該用銀二萬餘兩」とある¹⁵。つまり、造船費用1万両余と雑費2万両余は2頭の象を暹羅から日本まで運搬する費用である。従って1頭当たりの費用は1万5千両になる。実際、鄭大威が広南産の象を日本に運んだ時、幕府にいくら支給されたかという直接的な記述は見当たらない。もし、暹羅からと同じような費用であれば、ベトナム国内で売買する象の価格である20両より、700倍以上も上回り、商人達は甚大な利益をあげたのであろう。一方、幕府がその高値をもってしても象を注文し、しかも力強い牡象だけでなく、子供を産む目的で飼育

⁸ 現在ベトナムのクアンチー（広治）省にある。

⁹ グェン・カック・テウアン校訂『黎貴悳選集』三卷『撫辺雜録』第二部、2007年、271頁。

¹⁰ ジャン・バプティスト・タヴェルニエ『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』、レ・テウ・ランベトナム語翻訳、2005年、38頁。

¹¹ 近藤守重『安南紀略藁』、1906年、27頁

¹² 林復斎等編『通航一覽』第四、巻之百七十五、1967年、520頁。

¹³ ベトナムは17世紀から18世紀末まで現在のクアンピン（広平）省のザイン河を境線に、ダンゴァイ（クアンピン省以北、鄭氏の支配地、トンキン（東京）と呼ばれる）とダンジョン（クアンピン省からフエン（富安）省までの地域、阮氏の支配地、交趾や広南とも呼ばれる）に分裂されていた。また、ダンジョンは中国から離れた地方との意味で、ナムハー（南河）とも呼ぶ。

¹⁴ 近藤守重、前掲書、22頁。

¹⁵ 林復斎等編、前掲書、521頁。

される牝象とつがいとで請求した理由は、象を日本で長く飼育する目的もあったと考えられる。

日本への海上旅に出す象はどの基準で選定されるかという問題も興味深い。前述した『撫辺雑録』には、ベトナムで国王への献上牝象は「高五尺五寸」とある。日本に来た象の中で、牝象は8年前に生まれ、日本到着時は満7歳で、前足の高さが「五尺六寸餘」¹⁶であった。実は牝象の高さに関する記述は史料によって微妙に違う。『通航一覽』には牝象はベトナム国内で献上された象の高さと同じく「五尺五寸」であったが、享保14年に著された『象志』には、牝象の前足の高さは「五尺七寸」とある¹⁷。前述の史料から、牝象の身長は五尺五寸から五尺七寸まで、所謂約1.7mになる。つまり、日本に来た牝象はベトナム国内で献上された象とほぼ同じ背丈であったことが分かる。逆に言えば、国内の献上象も貿易用の象も7、8歳ぐらいと考えられる。『安南紀略藁』には「牝象三歳に成り、乳放し致候、而から段々教込熟練いたし候」¹⁸とあるので、その年齢の象は調教されてから3～4年経過しているため、人の命令を理解することができる。そして、象の1.7mの身長も陸上の引率と海上の運搬に適切であったという判断に至る。

最後に象を載せた船であるが、幕臣である近藤重蔵は「此度廣南より象二疋乗渡り候南京造り之船に長さ十二丈八尺程幅二丈ほど深さ一丈四尺程御座候。先頃象乗渡り申候則壺疋式丈六尺程横一丈一尺程の所へ入申候但上日数三十七日其内土を踏不申候水もあひ申事不罷成候頭と前の方横木を打象留め仕置候其中より鼻を出し罷在候船中象部屋之内にて跡の方へ漸々ふり返り申候事罷成候。」と述べている¹⁹。「南京造り之船」とはジャンク (Junk) である。そのサイズは、長さが38.8m、幅が6.06m、深さが4.24mである。象用部屋は7.88m×3.3mのスペースである。象はその中で37日間留め置かれたのである。松浦章氏の研究によると、ジャンクは16～19世紀に海上貿易でよく活用され、その平均積載量は2,500トンであるという²⁰。明和4年(1767)7月16日に長崎に来た四番安南船についてはベトナムのホイアン(会安)から帰国した姫宮丸の乗員の執筆した『安南国漂流記』には、「安南より長崎まで、丑寅(北東)の方に向ひて、昼夜やすまず日数二十七日にて着仕り候」²¹とあり、安南から長崎までの行程が27日間かかることが分かる。享保13年に象を日本まで運搬した船は普通のジャンクより大きく、行程も10日間長かったことが分かる。

このように、近世におけるベトナムと日本の間で行われた象貿易に関する研究は、『安南紀略藁』、『通航一覽』、「茶屋新六交趾渡航図巻」など、日本国内の史料と絵図を再考

¹⁶ 近藤守重、前掲書、28頁。

¹⁷ 埼玉県立博物館編『特別展・象がゆく一将軍吉宗と宮廷「雅」』、霞会館、2000年、70頁。
1間は6尺、およそ1.8m。よって、4間は7.2mに相当する。

¹⁸ 近藤守重、前掲書、22頁。

¹⁹ 近藤守重、前掲書、28頁。

²⁰ 松浦章「16-19世紀中国 Junk によるベトナム・フェとの海上貿易」、『周縁の文化交渉学シリーズ7・フェ地域の歴史と文化』、2012年、515頁。

²¹ 松浦章、前掲書、511頁。

すると共に、『撫邊雜録』のようなベトナムの史料や、『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』のような西洋の史料とクロスチェックすることが重要であると考えられる。この事例から分かるように、グローバル化における日本研究において、資料源の国際的な活用が大きな役割を果たせるといえる。

2. 松阪縞のルーツに関する研究事例からみた日本研究の学際化

2.1 松阪縞のルーツに関する史料と文献

角屋家は元々信州松本（現在の長野県松本市）にある八幡宮の神官の出身であったが、15世紀から山田（現在の伊勢市）に移住し、廻船問屋を経営するようになった。移住して6代目の角屋七郎兵衛栄吉（慶長15年〈1610〉–寛文12年〈1672〉）は、22歳の時、初航海で安南（ベトナム）の交趾（中部）にあるホイアンへ渡って来たが、鎖国令が出されたため、ホイアンに41年間永住した。その間、七郎兵衛はホイアンの日本人町の最後の頭領として活躍をしながらも、故郷の松阪にいる家族と交信し、ベトナムの特産を贈り、伊勢神宮や松阪城下の寺社に金銭を寄進していた。角屋がベトナムから贈った特産の中で、木綿織や藍染の伝統のある松阪の人々に縦縞織のヒントを与えた織物があり、それが松阪の特色である松阪木綿（伊勢木綿ともいう）のルーツとなったとの仮説がある。その松阪木綿が18世紀に大量で江戸に送出され、江戸の庶民の新しい流行となったのである。松阪木綿は、昭和56年（1981）には文化庁によって、「無形民俗文化財」に選定されている。

角屋七郎兵衛に関する漢文は、ベトナムのホイアン市付近にある五行山の花巖洞窟の中で1640年に建てられた「普陀山靈中仏」の石碑にある。「日本宮七郎兵衛阮氏慈号紗泰供銭」とあるように、七郎兵衛は阮氏慈というベトナム人の女性と結婚して、観音菩薩像を造るために金銭を寄付したことが分かる。日本においては、伊勢市の神宮徴古館と名古屋大学付属図書館が所蔵する「角屋文書」がある。これは角屋本家伝来の中世末から明治期にかけての110点の史料群であり、家系図、来簡、朱印船関係文書、藍玉問屋関係資料などが含まれるが、「安南交趾角屋栄吉遺書」は角屋やベトナム人の妻、安南在住の谷村四郎兵衛等の書簡や記録が集められた重要な史料である。

七郎兵衛に関する二次資料文献は数多くあるが、一番古い研究は1887年に発行された『日本之光輝』にある関徳編著「角屋七郎兵衛安南に渡航し貿易を為す事」や、『学習院輔仁会雑誌』に1897年に載せられた松阪出身の松本章彦著「角屋七郎兵衛の伝」である。最近の代表的な研究と言えば、中京大学地域社会研究所の菊池理夫氏等の「松阪・ホイアンの交流の過去と現在―角屋七郎兵衛を中心として」というプロジェクトがあげられる。菊池理夫氏の研究グループは角屋に関する史料・文献の目録を作成し、角屋の生涯、松阪とホイアンの交流を分析し、研究ノートとして公表した。

筆者は1993年から1996年までの文化庁と昭和女子大学の共同実施の「ホイアン古い町並み調査」と、2014年から2016年までの昭和女子大学主催「ホイアン伝統的な衣服

調査」に参加した際、角屋七郎兵衛に関する資料文献を調べた。なかでも、一番関心を引かれたのが七郎兵衛自身の生涯を通じての、松阪縞織とベトナムとの関係である。松阪木綿についての研究は角屋七郎兵衛に関する研究より少ないが、特筆すべきは、1988年に発行された田畑美穂著『松阪もめん覚書・糸へん伊勢風土記』と2016年に三重県伝統染色研究会により編集された『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』である。前者は地元の研究者である田畑美穂氏により、松阪の木綿栽培、藍染、縞織などを初めて分析した研究である。後者は松阪木綿に関する近世以降の史料・文献を紹介し、木綿生産から販売までの流れを明らかにしたものである。

田畑美穂氏は『松阪もめん覚書・糸へん伊勢風土記』において、遠藤元男著『織物の日本史』を引用し、江戸時代半ばまで「縞」が「嶋」という漢字で書かれた理由が「嶋わたり」との意味であると述べた²²。そして、元禄8年(1695)刊行の西川如見著『華夷通商考』の中で書かれた安南国交趾の土産である紗(花布)、紬、紗羅の他に「木綿島、柳条布ト云」との記述を典拠にし、交趾から縦縞が伝わったことを唱えた²³。田畑氏は松阪木綿の模様について、「東南アジア特有の色彩感を藍染め木綿の中に調和させ、粋好みの江戸庶民向けに考え出した松阪商人たちのファッション感覚と、これにこたえた織り手、染め師の高い美意識や技術には、今さらながらさすがといわねばならない」と主張した²⁴。しかし、神宮徴古館蔵の「角屋文書」では七郎兵衛が日本へ贈ったのは「白紬」、「黒紬」、「木綿」、「北絹」、「白綾子」との記述しかないことから、田畑氏は「おそらくモノが木綿だけに、ことさら贈りものとしてはとり上げられず、むしろ、託されてきた船頭や水夫たちの衣服や持ち物などに、無造作に用いられているのを、目ざとい松阪商人たちいち早くこれを商品化してみようと持ち前の才覚を働かせたのではなるまいか」と分析した²⁵。つまり、氏の仮説のキーポイントは、松阪の縞織のルーツが「安南」から伝わった色彩感のある「縦縞」である。

一方、『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』は、松阪木綿は染色が美しいことと、撚糸の細め目で、布の丈夫さよりも「粋」を好んだ江戸商人に人気があったと述べた²⁶。松阪木綿のルーツに関しては田畑氏と違った2つの指摘がある。まずは田畑氏が提唱した松阪木綿のルーツは交趾である説に対し、文化4年(1807)成稿の松本守善と角屋有喜共編『安南記』に引用された『華夷通商考』において、「木綿島」が暹羅・莫臥爾・閣婆等の土産でもあることをあげた。それを典拠とする場合、木綿島のルーツは安南のみならず東南アジアの他の国に求める可能性もありえるという。2つ目は角屋七郎兵衛が寛永8年(1631)にホイアンへ渡航したが、松阪や長崎にいる親戚に、安南国の産品を贈ることが可能になったのは寛文6年(1666)頃であった。しかし、それより約20年前、

²² 田畑美穂『松阪もめん覚書 糸へん伊勢風土記』、1988年、123、126頁。

²³ 田畑美穂、前掲書、123、124頁。

²⁴ 田畑美穂、前掲書、126頁。

²⁵ 田畑美穂、前掲書、125、126頁。

²⁶ 三重県伝統染色研究会編『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』、2016年、11頁。

正保2年(1645)に刊行され、松江重頼著『毛吹草』の第4巻にある「名物」には、伊勢国の産物は「木綿」としか書かれないのに対し、武蔵国と豊前国は「木綿嶋」、摂津国には「川崎嶋木綿」と記されているのである。そのため、七郎兵衛が家族と交信する以前も、日本にはすでに縞木綿が存在し、松阪縞のルーツを七郎兵衛に求める説と矛盾が生じると指摘された²⁷。

上記の問題に関して、本稿の筆者はこのように解釈したい。正保2年(1645)の『毛吹草』に伊勢国の産物が「木綿」としか書かれないことは、当時の伊勢国、とりわけ松阪において、木綿織はあったが、「縞織」ではなかったということが分かる。その後、松阪縞が織られるようになったのは、他の地方か、海外からの影響を受けた可能性があると考えられる。田畑氏も元和年間(1615-1624)に縞織の木綿があったことを認めたが、それは横縞か格子であり、縦縞が交趾から伝わったと主張した²⁸。つまり、筆者は松阪木綿のなかで、ベトナムの要素が反映される可能性があることを判断し、その方向性のもとで研究を模索することにした。

2.2 研究方法の学際化により明らかになったこと

歴史研究は史料典拠が重要であるが、松阪縞織のルーツに関しては未だ直接的な歴史の記録が見当たらない。その場合、文化人類学的な研究方法と資料に求めることも考えられる。本来は17世紀後半にベトナムから贈られた衣服や縞帳が残っていれば重要な資料となる。その染色方法や織り方を分析し、松阪木綿の変遷とベトナムの伝統的な布との関連性を明らかにする可能性があると思う。

2016年11月26日に松阪市と松阪木綿協議会が共催した「松阪木綿シンポジウム」において筆者は松阪の御絲織物株式会社と松阪市の松阪もめん手織り伝承グループゆうづる会の代表者と意見交換を行った。松阪縞織のルーツがベトナムの越族かチャム族の布であるという意見が出された。筆者は松阪木綿のキーポイントと言え、木綿、縦縞、藍染という3点があることを強調した。従って、松阪木綿のルーツは越族とチャム族の物である可能性が低いと述べた。つまり、越族は原始・古代時代に藍染した可能性があるが、中代以降、茶染めと黒染めの衣服を一般的に着用したし、縦縞を織らないのである。一方、チャム族は木綿でなく、シルク織が一般的であり、藍染をしないのである。1990年代ホイアンを調査した時、筆者はホイアンの周辺に住んでいる少数民族の行商人から藍染で縦縞のある木綿を買った経験があることから、17世紀に日本に持たれた織物のなかに、ホイアン周辺に居住した少数民族の布が含まれる可能性があるともみなしている。特に2014年8月にベトナム国家無形文化財として選定されたコテウ族²⁹の木綿織は

²⁷ 三重県伝統染色研究会編、前掲書、12頁。

²⁸ 三重県伝統染色研究会編、前掲書、126頁。

²⁹ コテウ族はベトナムのチョウサン(長山)山地に居住している少数民族であり、2009年の統計によれば約6万人の人口がある。(ベトナム放送局・民族班のウェブサイト <http://vov4.vov.vn/TV/gioithieu/dan-toc-co-tu-cgt2-3230.aspx>)

松阪縞織と比べて、木綿、藍染、縦縞という3点で共通していることを着目した。それで、松阪縞とコテウ族木綿の関連性を調査し始めた。

筆者は2013年10月、2016年11月と2018年11月に角屋の故郷で松阪木綿を調査した。また、2018年11月に三井文庫で資料収集も行った。一方、2016年8月と2017年2月に2回ほどコアンナム（廣南）省ナムザン（南江）郡ザラ村においてコテウ族の木綿を調査した。調査の目的は、上述した古い縞帳を資料として求めること以外、松阪木綿センター、来迎寺、歴史民俗資料館、御絲織物株式会社などを回り、綿栽培から糸の紡ぎ、染色と機織りに関する情報収集もある。松阪では綿栽培を復活させるNPO法人生ゴミリサイクルの亀井静子氏、御絲織物株式会社社長の西口裕也氏と橋本広次氏、松阪もめん手織り伝承グループゆうづる会の森谷尚子氏にインタビューを行った。一方、ザラ村では、現地のコテウ族の女性たちに糸の紡ぎ方や染色方法、腰織方法などに関してインタビューした。各作業を写真とビデオで撮影して記録した。

筆者の古い布に関する調査の結果として、松阪で見つけたのは、松阪木綿振興会の保存する安政4年（1857）の『嶋見本帳』と明治7年（1874）の『御嶋之帳』に貼られた数百枚の小切れである。一方、三井文庫で確認できた一番古いのは文化3年（1806）の『嶋本』、嘉永元年（1848）の『嶋本』、嘉永年間（1848–1855）から明治年間（1868–1912）の『松坂嶋見本』である。それらの嶋本は角屋七郎兵衛の時代より約150年後のものであるため、十分に「日本化」されたのであるが、その色彩豊富な縦縞の模様が驚くほどベトナムの山岳地に住んでいる少数民族の藍染に類似するのである。

そして、現地調査で明らかになったのは、松阪とコテウ族の伝統的な綿栽培、糸紡ぎ、染色、縦縞織の技術と原則が意外に共通していることである。2017年2月にコテウ族の木綿調査に参加した松阪もめん手織伝承グループゆうづる会の代表者もそれを確認している。特に、染色技術の共通性が着目された。両者とも色合いの主調は藍、赤と茶である。赤色と茶色の場合は原則として染料を茹でるのに対し、藍が生きていると認識されるため、藍を茹でないで、「寝かせながら発酵させる」特徴がある。それは藍葉を水に入れて色が出るまでよく混ぜ、石灰か貝殻の粒を加え、中和しながら発酵させる工程で反映される。そして、経糸の整形が縦縞デザインに重要な作業であることも共通している。但し、松阪では松阪もめん手織伝承グループゆうづる会以外、藍染から縞織までの作業が殆ど機械化されたのに対し、コテウ族は昔ながらの染色、腰機の手織りを続けているのである。

このように、文化人類学的な調査を通じ、松阪縞織とコテウ族の木綿の関連性を求めてきたが、まだ、松阪木綿のルーツがコテウ族の織物といえる結論には至っていない。今後の研究課題として、伊勢神宮徴古館、名古屋大学付属図書館において、松阪縞織のルーツに関する記録と文化3年（1806）の『嶋本』より古い木綿縞があるかどうか確認したい。また、ホイアン周辺に居住しているコテウ族以外の少数民族の伝統的な染色方法や機織も研究したい。

一方、松阪とコテウ族の調査は研究以外の成果が得られた。それは、両国の文化遺

産を担う人々の交流と、彼らの製品に活気を加えることである。松阪市や、御絲織物株式会社、松阪もめん手織り伝承グループゆうづる会の代表者はホイアンを訪問し、ザラ村のコテウ族、ホイアン・シルク・ヴィレージで活躍している越族、チャム族の人々と、伝統技術やその保存と活用に関する意見交換を行った。その結果、ベトナムのシルク糸を横糸として織り込んだ作品が織られるようになった。今後も、松阪とコテウ族やホイアン・シルク・ヴィレージとの交流が継続できるようにサポートしたいと考えている。

結びに

本稿で取り上げた「象の貿易」と「松阪縞織のルーツ」は、日越交流史のなかでは些細な研究テーマではあるものの、この研究領域では、日本やベトナムという国境を越えて関連する資料・文献のクロスチェックを行い、歴史学というディシプリンを超えた、学際的な研究方法の必要性を痛感している。このように、グローバル化が進む現在、どんな研究でも学際化と国際化の潮流が生じている。そして研究の実効性がより求められるようになった。日本研究は今まで海外発信指向が重視されたが、日本国内への発信も求められると言えよう。そのためには、日本人と外国人の研究者ネットワーク構築が重要であるが、一般の人々や組織の研究への参加、研究成果への貢献と現在社会における日々の生活への活用も、日本研究に新しい原動力を与えると思われる。

参考資料・文献

- 九州国立博物館編『ベトナム物語—大ベトナム展公式カタログ』、TVQ九州放送、西日本新聞社、2013年。
- ゲン・カック・テウアン校訂『黎貴惇選集』三卷『撫辺雜録』第二部、教育出版社、2007年（Nguyễn Khắc Thuần hiệu đính, “Lê Quý Đôn tuyển tập”, “Tập 3: Phủ biên tạp lục”, Phần 2”, NXB Giáo dục, 2007）。
- 近藤守重著『安南紀略藁』、国書刊行会編『近藤正斎全集』雀羅書房、1906年。
- 埼玉県立博物館編『特別展 象がゆく—将軍吉宗と宮廷「雅」』、霞会館、2000年。
- ジャン・バプティスト・タヴェルニエ著『トンキン王国へのおもしろい新旅行記』（1681）、ベトナム語翻訳版レ・テウ・ラン訳、ハノイ世界出版社、2005年（Jean Baptiste Tavernier, “Relation nouvelle et singulière du Royaume de Tunquin”(1681), Lê Tư Lành “Jean Baptiste Tavernier: Tập du ký mới và kỳ thú về vương quốc Đàng Ngoài”, NXB Thế giới, 2005）。
- 田畑美穂著『松阪もめん覚え書 糸へん伊勢風土記』、中日新聞本社、1988年。
- 林復斎等編『通航一覽』第四、卷之百七十五、清文堂、1967年。
- 松浦章著「16—19世紀中国 Junk によるベトナム・フェとの海上貿易」、『周縁の文化交渉学シリーズ7 フェ地域の歴史と文化』、関西大学、2012年。

三重県伝統染色研究会編『松阪木綿・史料に学ぶ木綿の歴史』、三重県伝統染色研究会、2016年。

山下幸子「享保の象行列」、尼崎市史編集室編『地域史研究』第2巻第2号、1972年。

山下恒夫再編『石井研堂コレクション江戸時代漂流記総集第二巻』、日本評論社、1992年。

歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題—継承と展開の50年』、大月書店、2017年。